

氏名(本籍)	なか やま かんじろう 中山 勘次郎 (山形県)
学位の種類	博士 (心理学)
学位記番号	博乙第729号
学位授与年月日	平成4年1月31日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
審査研究科	心理学研究科
学位論文題目	児童における動機づけ志向性が個人的・社会的事態での達成行動に及ぼす影響
主査	筑波大学教授 教育学博士 高野 清 純
副査	筑波大学助教授 文学博士 山本 真理子
副査	筑波大学助教授 教育学博士 新井 邦二郎
副査	筑波大学教授 中野 良 顕
副査	筑波大学助教授 五十嵐 信 敬
副査	筑波大学教授 岡田 守 彦

論 文 の 要 旨

(1) 本論文の構成

本論文は7章、本文363頁、引用文献19頁、資料42頁より成っている。

(2) 本論文の目的

日常児童が行う大部分の学習は、学級を中心とした社会的関係の中でなされている。こうした社会的関係は、学習や課題解決過程に対する動機づけと密接に関わりながら、児童の達成行動に影響していると考えられる。それにもかかわらず、現在のところ社会的関係の積極的役割について、経験的に検証しようとした研究は少ない。本研究の目的は、社会的動機づけと課題解決過程への動機づけの達成行動への影響を、実験場面から日常の教室場面において分析検討しようとするものである。

(3) 研究の方法と結果

そのために、本研究では社会志向性、課題志向性という動機づけの方向性が概念化された。社会志向性とは、対人関係や他者からの評価というような社会的手がかりへの感受性が高く、それらの手がかりを有効に利用しようとする積極的興味である。課題志向性とは学習課題や課題解決過程そのものに対する興味である。

まず、各児童の両志向性の程度を測定するための尺度が構成された。さらに、両志向性の相対的な高低に基づいて、両志向性とも高い群(HH群)、社会的志向性が優位な群(HL群)、課題志向性

が優位な群（LH群）両志向性とも低い群（LL群）の類型化が試みられ、達成行動を始めとする、さまざまな特性について比較検討された。

その結果、次下のことが明らかにされた。

①志向性と有能感とは、対応するスキル領域ごとに強く関連している。また、有能感や達成動機とは、両志向性とも関連があった。さらに、社会志向性は親和動機の中の積極的な成分と密接に関連していた。

②各群ごとの特徴としては、HL群は統制感と統制の位置、達成不安、学習目標などの指標から、成人への依存に基づいた達成傾向と評価懸念の存在を示した。HH群は達成動機や統制感が高く、成功・失敗における努力の役割を重視し、学習活動に積極的で、適応的な態度を有していた。LL群の認知は悲観的であり、成功・失敗を努力に結びつけず、達成への努力を妨害するような傾向があった。

③仲間集団や教師との相互交渉をとまなう学習・課題解決場面や日常の交友場面で、志向性が児童の行動や認知に及ぼす影響は、次のとおりである。HH群は協同・競争学習の双方を愛好するが、特に競争学習モードを好む傾向が強かった。実際の共同課題解決場面においては、自己の作業量が多いとともに、共同者に対する主導的な働きかけがみられた。教師の提案・助言に対しても敏感に反応した。交友関係でも、新しい友人の形成を積極的に試み、特に功利的な友人関係を多く報告している。

HL群は静的で、親和的・友好的態度や行動を示した。協同学習を好み、共同課題解決場面では親和的な働きかけが多かった。交友関係では、交友的・相互信頼的であった。LH群は対照的で、対人相互交渉への関心が低く、自律的な達成を志向していた。共同課題解決場面では、作業量が最も多い一方、共同者との相互交渉には消極的であった。教師の事態を明確にするための働きかけは受け入れても、指示的な介入には否定的であった。友人との相互交渉が少なく、新しい交友関係の開拓より、古い交友関係の維持に固執する。

LL群は、学習活動全般に対して否定的・消極的な態度を示し、共同課題解決場面でも特徴的な結果を見出せなかった。教師に対しては、情報的な相互交渉への関心が低く、個人的・感情的関係に焦点を当てていることが示唆された。交友関係では、選択・被選択数とも低く、一般的に消極的であった。

④達成水準に対する他者評価と自己評価が、達成行動や態度に及ぼす影響に関しては、HL群とLH群との間に、対照的な結果が見出された。HL群では、母親からの評価や友人との社会的比較情報の影響を強く受ける傾向が認められた。興味の高い課題の遂行時には、能力評価場面で高く動機づけられる一方、興味が低く達成への不安が高い課題では、他者からの評価場面で学習が阻害された。他方、LH群では、母親からの評価や社会的比較情報に影響されず、自律的・自己決定的な達成場面に強く動機づけられ、そこでの学習効果が高かった。

HH群はこれら2群の中間的な反応を示した。即ち、評価・非評価の両場面で、比較的高い達成行動を示していた。ある場面では社会志向性の高い群の特徴を示し、他の場面では課題志向性の高い

群の特徴を示すという具合に、場面に依じてその行動を柔軟に変化させていることが明らかにされた。LL群では、社会的比較場面において、絶対的にも、相対的にも成功したにもかかわらず、達成意欲の低下を示し、自己評価に基づく学習効果が低く、学習効果と対応した正確な自己認知ができていない傾向が見出された。

以上の結果から、いわゆる内発的動機づけ型の達成行動を示す群や達成動機型の達成行動を示す群が明確化された。また、負方向の達成動機である失敗回避動機に対応するような評価懸念や無力感型の達成行動も明らかにされた。しかも、それは、社会志向性と課題志向性の組み合わせから理論的に予測し得るものであった。

最後に、本研究結果の教室場面に対する意義と示唆が述べられるとともに、残された問題点や今後の検討課題が考察された。

審 査 の 要 旨

冒頭にも述べられているように、児童の学習はほとんど常に対人的関連の中で行われているにもかかわらず、学習や達成行動に対する対人的関係の役割や機能についてなされた実証的研究は、きわめて少ないといえる。本研究はさまざまな心理学的手法を駆使することによって、社会志向性と課題志向性という動機づけが、達成行動や態度に及ぼす影響だけではなく、両志向性の組み合わせによる児童の類型化を試みている。その結果、広範な領域に及ぶさまざまな場面において、各群の行動や認知には、それぞれ独自の特徴が認められ、理論的に予測される結果とも、よく一致した傾向が認められた。

本研究はユニークなかたちで、動機づけを把え、単に実験的な状況の下だけでなく、日常の教室での行動との関連を明らかにした。さらに、動機づけの型による児童の特性や学習の型との関連など、学習指導上参考となる豊富な知見を得ることに成功している。これらの結果は、現在重視されつつある個性の教育に対する基礎的研究として重要な示唆を提供しているものと考えられる。本研究も完璧なものではなく、幾分トートロジーになった部分やLL群の達成行動や認知の問題の解明、変数間の関係の不明確さなどの指摘もあるが、それらは今後期待される課題といえよう。

よって、著者は博士（心理学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。